

市川自然博物館

12・1月号

（通巻第9号）

だより

シャッター
チャンス

～ノウサギの足跡～

雪の積もった朝は、がんばって早起きしてみましょう。家のまわりの見慣れた景色が、きっと新鮮で美しく見えるはずです。そして、真新しい雪の上に、なにか変わった足跡がついているかもしれません。

そんな朝、市北部の雑木林のまわりでは、ノウサギの足跡を観察することができます。前足と後足の足跡がT字型に交わり、特徴的です。ノウサギは夜行性で、人前にはめったに現れません。でも、こうやって足跡を見つけられれば、その林で今でもノウサギが暮らしていることがわかります。

特集 雑木林で

●冬の雑木林を

歩こう！

葉の落ちてしまった冬の雑木林。とても殺風景ですね。でも、下草が少なくなって、夏には行けなかった木の下が歩きやすくなります。日中天气が良ければ、風も林の外よりは弱いし、いやな虫にさされる心配もありません。冬は雑木林をじっくり観察するにはいいチャンスです。さあ、冬の雑木林にでかけてみましょう。

●落葉めくりを

してみよう

秋に落ちた枯葉で林の中はフカフカしています。こんなにたくさんの落葉、いったいどうなるのでしょうか。林の中を歩き疲れたらちょっとしゃがんで落葉を上から一枚ずつめくってみましょう。さあ、落葉はどうなっているのかな？



1. 一番上は落ちたばかりの葉です

葉の形はほぼ完全です。一枚手に取って上を見てみましょう。その葉はま上の木からおちてきたのでしょうか。そうとも限らないようです。手を伸ばせる範囲でも、まわりの木から舞い落ちてきたいろいろな種類の葉が、混じっているようです。匂いも嗅いでみましょう。まだ木のほのかないい匂いが残っているのでしょうか？いろいろめくっていけば、ダンゴムシやゴミムシなどが集まって、冬越ししているのに出会えるかもしれません。

2. その下はどうなっているかな

葉の形はくずれてきました。色も黒ずんできて、少し湿ってきます。一枚一枚がくっついていて、すきまが少なくなりました。くだけて細かくなった葉があります。端からぼろぼろになった葉もあります。葉をすかして見てみましょう。葉が薄くなったり、小さな穴が開いて表面に細かい網目模様が見られます。これは、葉の柔らかい部分からとても小さな生物たちがゆっくりゆっくり食べたり分解した跡です。こうして、多くの生物の働きによって、大きな葉がだんだん細くなっていくのです。

落葉めぐり



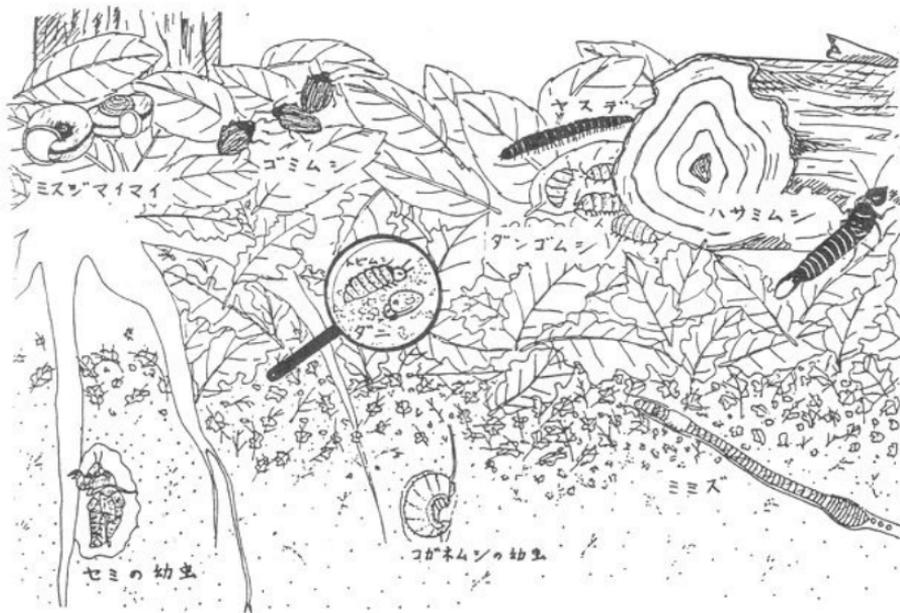
3. 葉の形はもうわかりません。

落葉は、ぼろぼろです。最初の葉の形はわかりません。もうこの秋に落ちた葉ではないでしょう。最後に残っているものは何でしょうか？細かいかけらと繊維のようなものがほとんどです。この繊維は葉脈と呼ばれるもので、とても丈夫で腐ったり生物に食べられにくいのです。細かく細かくなって土の中に混じり込んでしまいます。

4. さらにその下には…

黒くて、つぶつぶの土が出てきました。しっとりとしていて、栄養豊富な林の土のできあがりです。

このように、落葉を順にめぐっていけば、時間のかかる林の土のできかたを観察することができます。さあ、林にでかけてみましょう。きっとおもしろい発見がありますよ。



落葉、下の生物たち

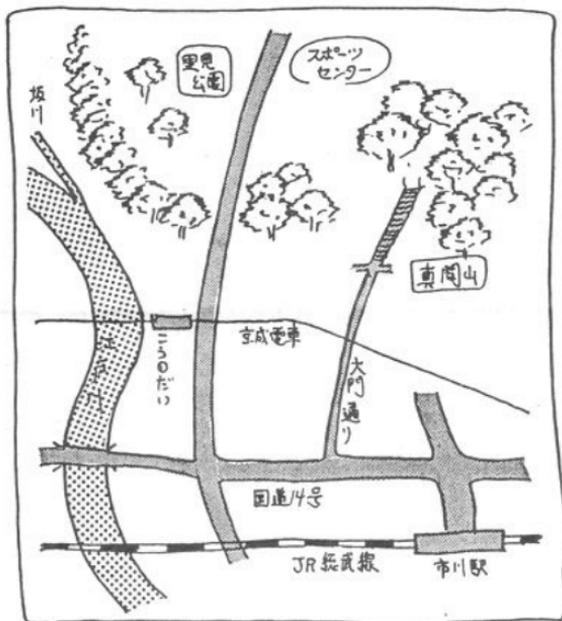
市川・自然探検

～真間山～里見公園～

市川市内を南北に歩くと、川沿いの道以外どこをどう通っても、必ず一度は坂にぶつかります。南部から北部へ行く時には上り、北部から南部へ向かう時には下ります。この坂は、およそ5,000年ほど前の縄文時代の中頃、市川の南半分が海だった頃の海岸や河口付近にできた崖に由来した地形です。

坂がある斜面は、部分的に林になっています。斜面を切り開いてもあまり活用できないことや、木が根を張っていたほうが斜面が崩れにくいことなどの理由から、林のままで残されてきたためです。市川市内に今も残っている林は、大部分が斜面林です。

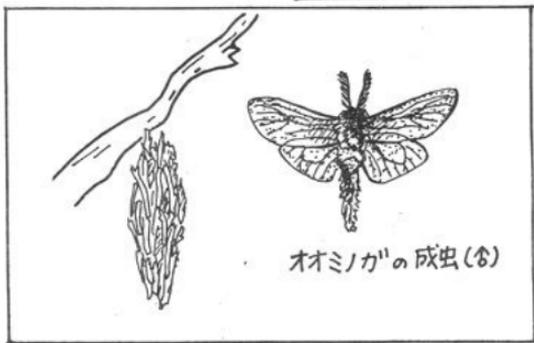
斜面林は、林の幅でいえばせいぜい20～30mしかありません。しかし、斜面にあるために木が前後に階段状に生えており、また、斜面の向こうが見えないため、見た目には大きな木が繁った豊かな森の印象を受けます。そんな斜面林の代表が、真間山から里見公園へ続く斜面林です。この林には、特に古い照葉樹が多く、かつてこの一帯が照葉樹林だった頃のなごりだと思われ



市川のこん虫 ミノムシ



冬、市内の公園や道沿いのサクラなどの木の枝に、ミノムシがぶら下がっているのをよく見かけます。ミノムシはミノガというガの仲間の幼虫で、種類によってミノムシの入っているミノの大きさや形がちがいます。市内には、オオミノガ、チャミノガ、クロツヤミノ



ガの3種類のミノガが普通に見られますが、木の枝についているのは、オオミノガのミノです。他の2種は、小型のミノをつくるので、あまり目立ちません。ところで、ミノガの仲間の生態はガの仲間でもちょっと変わっています。オスの成虫にはちゃんと翅がありますが、メスの成虫は翅も触角もなく、幼虫の姿のまま一生をミノの中で過ごします。この冬は、公園や街路樹、そして家の庭木でミノムシのミノを探してみ、その大きさや形やミノの材料を調べてみましょう。

むかしの市川 ～その7～

雁の話

(博物館指導員 玉置善正 記)

市川の海岸では、たくさんの渡り鳥が見られます。それは昔ながらの光景…いえ、少し違います。かつては雁の渡りも見られたのです。

雁(かり)は、マガンなどガンの類の古い呼び方です。ガンの仲間は多くのカモ類と同じ冬鳥で、秋に北の国からやって来て、春に帰って行きます。歌にあるように、たくさんのガンが並んで、「さお」(一直線)になったり「かぎ」(への字形)になったりして、飛んでいきます。夕方や月の明るい夜などに、雁がか

わるがわる鳴きながら渡って行くのを見ると、なんとなくものさびしく、見えなくなるまで見送っていたものです。

東京湾の埋め立てがはじまってからではしょうか。雁の渡りが見られなくなりました。残念なことです。

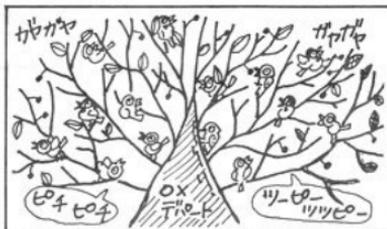




観察園の冬の主演は、なんといっても鳥たちです。寒さの厳しい北の地方からやって来る冬鳥たちで、鳥口密度(?)は倍にふくれあがります。シジュウカラやメジロといった一年中観察園で見られる鳥の数も、冬の間だけここにやってくるものがあるので、増えています。

特にこの時期になると、いろいろな種類の小鳥が一つの大きな群れ(混群)を作って行動するので、いっそう賑やかになります。シジュウカラやメジロの群れには、キツツキの仲間のコゲラやその小ささでは日本で一二を

争う、キクイタダキもいます。昔、縁日のおみくじひきの芸で腕をならしたヤマガラもいます。わずかに甘い実が残った大木に、小鳥たちが口々に何かを囁きながら集うさまは、さながらデパートのバーゲンセール会場を見ているようです。

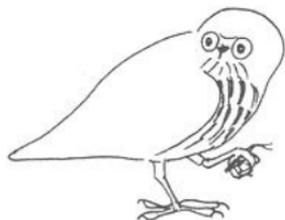


行徳野鳥観察舎 だより

アオバズク

低気圧の通過による激しい風雨がおさまって、晴れ上がった夜空にみごとな月がでた。「アオバズクらしいよ、見にきてごらんよ。」主人に呼ばれて出ていくと、30m離れた対岸の柱に小さな影が止まっているのが見えた。双眼鏡で見ると、丸い頭をしきりに動かして、あちこちを眺めているのがよくわかる。輝く黄色い虹彩が目には浮かぶようだ。

アオバズクは間もなく飛び立ち、獲物を探すようにふわふわ飛んだかと思うと、空中で急に向きを変え、何かを追いかけた。すぐにもとの柱に戻り、足を口もとに持っていつては、むしって食べている。蟻だろっか。東南アジアまでの長い旅路は始まったばかり。しっかり食べて、気をつけて渡ってお行き。



文と絵・運尾純子

寄贈標本展

12月8日(土)～1月15日(火)

自然博物館には、これまで多くの方々から寄贈していただいた貴重な標本が数多く収蔵されています。そのなかには、姉妹都市のメダン市(インドネシア)や友好都市の樂山市(中華人民共和国)から送られた外国の動植物の標本もあります。今回の特別展では、これまでに紹介しきれなかった寄贈標本を、皆さまにご紹介いたします。

展示案内図

